



みなみっ子

73号

令和8年10月7日(水)

南城市立大里南小学校

文責 校長 與儀 毅

学校教育目標

自立

協働

創造

小学4年生の国語の教科書には、今も「ごんぎつね」が掲載されています！

『ごんぎつね』は1956(昭和31)年に教科書へ初掲載されて以来、半世紀以上にわたり小学校4年生の国語教科書(全発行社)に採用され続けています。

1 『ごんぎつね』が全教科書に掲載される理由

教育的・文学的な観点から、次のような明確な理由があると考えられます。

①「すれ違い」が生み出す深い心情理解

ごんの「つぐない」の気持ちが兵十に届かず、結末で撃たれて初めて伝わるという痛切なすれ違いが描かれています。単なる勧善懲悪ではなく、「人間の孤独」「他者と分かり合うことの難しさ・尊さ」を多角的に考える教材として非常に優れています。

②登場人物の視点変化と情景描写の教材性

ごんの視点と兵十の視点の移り変わり、彼岸花や雨といった季節・情景描写と心情の結びつきなど、物語の「読み深め」に必要な国語の重要要素が凝縮されています。

③多様な議論を生む対話型授業への適性

「兵十はごんを撃ったことを後悔したか」「ごんは報われたのか」など、読む人によって解釈が分かれるポイントが多く、児童同士の学び合いや多様な意見の交流を引き出しやすい構造になっています。

2 作者・新見南吉(にいみ なんきち)とはどんな人？

29歳という若さで亡くなった「日本のアンデルセン」とも称される童話作家です。代表作は『ごんぎつね』『手ぶくろを買いに』『おじいさんのランプ』『牛男』など

①幼少期の孤独と作品への影響

4歳で実母を亡くし、継母との関係や養子縁組を経験するなど、幼少期から強い孤独感を抱えて育ちました。この背景が、作品に漂う「ひとりぼっちの寂しさ」「あたたかい心の交流を求める切実さ」に強く反映されています。

②『ごんぎつね』執筆のエピソード

南吉が『ごんぎつね』を書いたのは、なんと17歳(旧制中学5年生)の時でした。自身の故郷に伝わる民話をベースに、孤独な狐のごんと自分自身の寂しさを重ね合わせて執筆したとされています。後に鈴木三重吉が主宰する児童雑誌『赤い鳥』に投稿され、18歳の時に掲載されました。

③短くも情熱的な生涯

東京外国語学校(現・東京外国語大学)に進学後も創作を続けましたが、若くして結核を患いました。故郷で女学校の教師を務めながら執筆活動を続けましたが、病状が悪化し29歳の若さでこの世を去りました。生前に刊行された単行本は僅か2冊でしたが、没後その文学的価値が評価され、現在も広く愛され続けています。

なぜ『ごんぎつね』は半世紀以上も愛されるのか？～名作の魅力と作者・新見南吉の生涯～

わずか17歳で執筆された名作



幼少期の強い孤独感と故郷の民話を重ね合わせて描かれた。

29歳で早世した「日本のアンデルセン」



結核のため若くして死去するも、没後に評価が高まった。

1956年から全社の教科書へ継続掲載



半世紀以上にわたり小学4年生の国語教材として愛される。

「すれ違い」が教える他者理解の尊さ



届かない償いを通して、人間の孤独と分かり合う難しさを学ぶ。

多様な解釈を生む対話型授業への適性



結末への解釈が分かれ、児童同士の活発な議論を引き出す。

世代を超えて受け継がれるメッセージ



人間の弱さと優しさ、そして理解の架け橋となる物語。